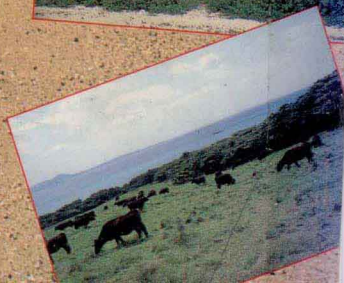


新婚旅行は 無人島

箕田律子

草思社



新婚旅行は 無人島

箕田律子

草思社

新婚旅行は無人島

1989 © Ritsuko Minoda



著者との申し合わせにより検印廃止

1989年9月11日 第1刷発行

1989年10月30日 第2刷発行

著者 箕田 律子

装幀者 平野 甲賀

発行者 加瀬 昌男

発行所 株式会社 草 思 社

〒150 東京都渋谷区神宮前4の26の26

電話 東京03(470)6565 振替東京7-23552

印刷 杜光舎

製本 大口製本

ISBN 4-7942-0354-3

Printed in Japan

はじめに

久しぶりに雨が上がり、青い空と緑の海が見える。たまった洗濯物を干そうと外の物干し場に出ると、草を食べていたヤギたちが驚いて逃げていった。もうすぐ子ヤギが何匹か産まれるだろう。畑の中央にはパイヤの木。その向こうの海をお船が通る。

沖縄のサンゴ礁の島、石垣島の岬の牧場に住んで四年になる。都会育ちの私が、こうして緑に囲まれた場所で貝や魚をとり、アヒルを飼い、野菜を作って暮らしている。横浜で小学校の教師をしていた頃には想像もしなかった生活だ。

二十七歳のとき、思いたって青年海外協力隊に応募した。思えばこの頃から人生の景色が変わってきたようだ。

子どもの頃から「南」に憧れていた。アフリカ、東南アジア、南太平洋、そして無人島、ヤシの木、こんな言葉を聞くとワクワクしてしまう。寒いのが苦手だという単純な理由もある。

協力隊員として派遣された先は、タイの首都バンコクだった。ゴミゴミした町中にある学校で、

日本語教師として二年間働いた。

モノが豊富で活気にあふれた人口密集地という意味では、バンコクは東京とほとんど変わらない大都会だ。そんなバンコクの中で、毎日満員バスにゆられて通勤していた。

帰国後すぐに小学校教師に戻り、日本での平凡な生活が再開した。だがそれも束の間、半年後に今度はタイで知りあった同じ協力隊のOBと結婚し、彼とともに、私にとってはまったく未知の地、石垣島に住むことになった。

それは急転直下の出来事であり、私としては、協力隊で派遣される以前にも海外旅行で行ったことのあるバンコクでの生活より、下調べもなしに飛びこんだ石垣島の僻地での結婚生活のほうが、ずっとカルチュア・ショックが大きかったのである。

さまざまな人びとが集まる都会では、多様な価値観が生まれ、個々の自由な生き方が許される。国のちがいはあっても、都会の暮らしという点では、東京とバンコクでの生活は共通していた。

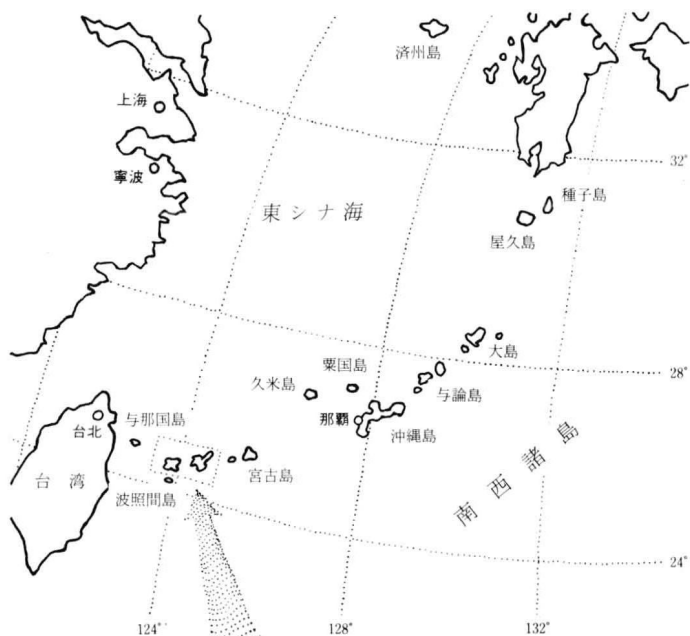
外国での言葉や習慣は覚えればよい。気候や食べ物のちがいの、時間がたてば慣れてくる。だが、個人の価値観や生き方というのは、そう簡単には変えられない。

都会の人は、田舎の山や海の美しさに安らぎを見出す。しかし、実際にそこに住んでみると、遠くから田舎を眺めていたときにはわからなかったことがよく見えてくる。もちろん、自然とともに生きることの喜びや感動は得られるが、かえって都会で暮らすほうがずっとのびのび生きられると思うことも、ままあるのだ。

思えばこの四年間、私は都会暮らしと田舎暮らしの物心両面でのギャップに日々直面しながら、

無我夢中で生きてきた。その体験から、農業や自然とかかわって生活することを夢見る都会の人たちには、美しい景色だけでは生きていけないということを、また過疎地で都会から若者やお嫁さんと呼ばれたいと考えている人たちには、都会者がどんなことで文化や価値観のギャップを感じて悩まされるかを知ってもらいたいと思うようになった。

この本は、都会育ちの私が南の島の半自給自足生活に飛びこんでみて感じた驚きや喜び、悩み等々をエピソードで綴った、ちよつとおかしな記録である。このささやかな記録が、これから新しい世界に挑戦しようとしている人たちに、少しでもお役に立てば幸いである。



新婚旅行は無人島
目次

はじめに

協力隊、結婚、石垣島へ

10

青年海外協力隊に参加 12

バンコクで日本語を教える 18

みのちゃんとの出会い 22

ピピ島のバンガロー 28

帰国後、突然のプロポーズ 33

新婚旅行は無人島

39

無人島探検 47

泳いで買い出しに行く 56

原始人ごっこストレス 63

イノシシの解体 69

獲物をかっいで石垣島へ 76

牧場の仕事と暮らし

82

お化けキノコに挑戦 84

牧場の牛は一夫多妻制 90

カウボーイは忙しい 97

魚とり名人、みのちゃん 104

メイド・イン・チリ捨て場 111

野菜畑は虫だらけ

117

カタツムリへの愛情 121

お野菜さまに皮はない 126

バクハツキャベツの拷問 131

真夏はタイ料理がいちばん 135

ミミーちゃんとはに丸 139

アヒルの屠殺に気絶寸前 146

うちの野菜は栄養たっぷり
152
カラスと知恵くらべ
157

石垣島の生活

167

水泳教室の先生になる
169

共働き主婦の毎日
172

歯医者さんごっこ
178

毒ガニにあたって入院
186

スラパ先生との再会
194

台風が来る
198

心配症とのん気屋
204

世界にいちばん近い島
211

あとがき

新婚旅行は無人島

協力隊、結婚、石垣島へ

私は、生まれも育ちも東京の世田谷区だった。

東急大井町線の上野毛駅から五十メートルほどのところにあった自宅は、環状八号線に面しており、玄関の戸を開けて一步出ると、そこは歩道の真ん中だった。交通事故を目撃することも珍しくはなかったし、一日一回は急ブレーキの音が聞こえた。

中学二年のときに、祖母、両親、妹、弟と私の一家六人は、やっと空気のよい横浜市郊外に引っ越しをした。当時、引っ越した先の横浜市緑区は、山を削って宅地にしたばかりで、まだ住宅はまばらだった。

ここで中学、高校時代を過ごし、地元の高校を卒業後、埼玉大学の教育学部に進んだ。そして、

大学を卒業して埼玉のアパートを引き払うと、私の両親がやはり教師だったこともあり、何の疑問も持たずに横浜市の小学校教師になった。

その後の五年間は、まあまあ平凡な毎日だったと思う。仕事にも慣れてくるし、友人も増える。変わったことといえば、四年目に転勤があつたことくらいだ。転勤といつてもすぐ隣の、歩いて通える学校にである。何も生活に変化はなかった。

同僚の女性たちは、年頃になると結婚するが、たいていは姓が変わるだけで、そのまま同じ学校に残つて勤めている。帰宅する方向が実家ではなく、新婚のアパートの方向に変わるだけだ。

彼女たちは、一、二年のうちに一人目の子どもを妊娠、出産する。職場のみんなから祝福されて出産し、産休が明けると、また以前のように勤めはじめる。勤務時間が終わると、急いで保育所へ赤ちゃんを迎えに行かなければならないから、独身のときのように暗くなるまで職員室に居残つて仕事することはできなくなる。だが、その分をどつさり「先生バッグ」につめて自宅に持ち帰り、夜中に子どもが眠ってから仕事をする。そして、次の日にはちゃんと仕上げて学校に持つてくるのだ。

数年後には夫婦の貯金を合わせて頭金にして、新しいマンションをローンで買う。ローンの支払いと子どもの教育費で経済的にはたいへんだが、清潔な台所やステキなインテリアのリビング・ルームで過ごすのも悪くない。

典型的共働き教師夫婦の生活。自分もいずれそうなるのではないかとボンヤリ考えていた。べつに望んでいたわけではないが、このままいけば現実はそうなりそうな気がしていた。

青年海外協力隊に参加

運命が変わったのは、二十七歳のとき。勤統五年目の秋だった。

その年の夏休みに、「バンコク・香港、六日間」というツアーに友人と参加した。初めての海外旅行で、見るものすべてが新鮮だった。行った先が途上国であったため、よけいに衝撃的だったのかもしれない。

初めて見る文字、初めて聞く言葉、食べ物、裸足で歩く人、学校へ行かない子どもたち、さまざまな人種の人びと、日本にはない不思議な匂い。すべてが驚きだった。

それまで持っていた、「暑くて、汚なくて、貧しい」という東南アジアのイメージが一掃された。不衛生で貧困であることにちがいはないが、それ以上に、途上国の人びとは人間らしく生き生きと生活している。高度に文明的で豊かなはずの日本が失いつつある何かが、アジアの途上国には残っている。そういう漠然とした印象が強く残った。

日本に帰ってからすぐ、独学でタイ語の勉強をはじめた。べつに何語でもよかったのだ。とにかく外国と接していたかったし、新しいことをはじめたかった。「青年海外協力隊」に参加する決意も、このときに生まれた。

何年も前から協力隊のことは知っていた。興味を持っていたし、行きたいという気持ちもあった

ので、パンフレットや願書を取りよせたこともあった。毎年、春と秋の募集時にはその都度考えた
が、二年間も日本を離れることになるし、仕事もやめて行かなければならないと思うと、さすがに
迷って、いつも応募する決心がつかなかった。それが今回は本気で参加する気になり、試験を受け
る準備をはじめた。

職種は日本語教師。学生のおかげから水泳の選手をしていたので、水泳指導でもよかったのだが、
このときは水泳指導の募集がなかった。そこで一年生にひらがなを教えてきた経験を生かして、日
本語教師で受験する、と願書に書いた。

試験科目の英語、日本語教授法の勉強は、毎夜、寸暇を惜しんでやった。日本語教授法について
は、日本語教師養成の通信教育を三カ月間受講した。その甲斐あって、十二月の一次、二月の二次
試験ともすんなり通り、しかも希望通りのタイ派遣が決まった。

出発は七月だが、その前に派遣予定者は全員、約三カ月間の訓練を受けることになっている。訓
練所の入所は四月一日。校長と教育委員会に頼みこんで、やっと二年半の休職扱いにしてもらい、
スーツケースをひとつ持って、渋谷区広尾の訓練所へ行った。

訓練生は、派遣国、職種、年齢もさまざまだ。全国各地から協力隊に参加した男女が、ともに訓
練を受ける。支給された紺のスーツの制服とネクタイをつけて、整列したり、海外事情などの講義
を受け、毎朝のランニングや体育の時間には、これもまた協力隊おそろいの体操服とシューズをつ
けて集合する。

起床は午前六時。六時半の点呼・朝の集いからはじまって、ランニング・清掃・朝食、午前の授業、昼食、午後の部、夕食、入浴、夜間の部、クラブ活動、自習時間と続く。

午後十時には夜の集い、十時半に就寝準備、十一時の消灯まで、じつに細かいスケジュールが組まれている。集合には一分の遅刻も許されないし、食事や自由時間のときも、決められた制服や体操服を着用することになっていた。外出も許可制。胸には全員名札をつける。

訓練中の協力隊員は、まだ派遣される前の身分だから、「隊員候補生」と呼ばれる。候補生たちのなかには、訓練所を「収容所」と呼んだり、訓練中の生活を「まるで囚人の生活みたいだ」という者もいた。

訓練所内では、もちろん酒類は禁止。週に一度だけ自由外出できる日曜日も、午後十時の夜の集いではシャキツとしていなければならないから、お酒解禁とはいえず、適量にとどめなければならぬ。酒好きの人にはこたえるだろう。しかし、これも訓練のうちだ。イスラム世界に派遣される隊員は、これから二年間はアルコール類の手に入りにくい国に住むのだ。だが、お酒を一滴も飲めない私にとっては、訓練所の規則は痛くも痒くもなかった。

同室の候補生たちは、いろいろな職業、経歴の持ち主で、協力隊参加の動機もそれぞれに個性があつて興味をそそられた。考えてみると、それまで自分のまわりには学校の先生しかいなかったの、私にとってはまったく新しい世界との出会いであり、じつに刺激的だった。

だが、このときはまだ、将来の夫となる箕田俊晴（通称みのちゃん）とは会っていない。彼は私より二カ月半後に入所する一期後輩というわけで、タイに派遣されて現地で出会うまでは、まった